

AA 研共同研究プロジェクト「総合人間学の構築」 2009 年度第 1 回研究会

日時：2009 年 7 月 25 日（土）13 時～18 時

場所：東京外大本郷サテライト 8 階会議室

報告：

- 1) 石堂常世（AA 研共同研究員・早稲田大学教育学部教授）
「青少年非行の予防・対策からの「徳育」再考」
 - 2) 杉本良男（AA 研共同研究員・国立民族学博物館教授）
「インドの宗教ナショナリズムと〈ヒンドゥー〉意識の転換」
 - 3) 中谷英明（AA 研所員）
「総合人間学から見えて来たこと」
 - 4) 内堀基光（AA 研共同研究員・放送大学教授）
「互酬性をめぐって：贈与と交換、集団と資源、意識と信頼、そして時間と死」
 - 5) 峰岸真琴（AA 研所員）
「辞書と認識—タイ語辞書の開発を例に」
-
-

1. 「青少年非行の予防・対策からの「徳育」再考」

石堂常世（AA 研共同研究員・早稲田大学教育学部教授）

物質的欲望中心の生活観や個人的・相対的な価値観が好まれている今日、家庭教育はもとより、学校における児童生徒の徳育は岐路に立っているといえる。本論では、人間性を豊かにするという広い観点からの徳育よりも、視点をより具体的にして、多くの国々が腐心している青少年非行の予防と対策の観点を切り口にして、規範意識の醸成の観点から徳育の現状と課題を再検討した。その際、フランスと日本の比較文化的視点を入れて考察した。日本の道德教育は心情にのみ訴え、歴史的、世界的に見るといふ社会的、論理的洞察に欠ける点が問題である。

2. 「インドの宗教ナショナリズムと〈ヒンドゥー〉意識の転換」

杉本良男（AA 研共同研究員・国立民族学博物館教授）

インドのナショナリズムは、19 世紀初頭から宗教・社会改革運動として勃興し、印パ分離独立後とくに近年のポスト・モダン状況の中で急速に台頭したヒンドゥー・ナショナリズムへと至る宗教ナショナリズムとして展開してきた。この間、西欧キリスト教、イスラームなどの外部世界との関係の中で、インドにおけるヒンドゥー意識がどのように転換し、今日のコミユナル問題へとつながっているのかを概観し、近代的な「宗教」概念がはらむ問題点を指摘した。伝統復帰を唱えるナショナリズムあるいは反近代主義が、実は西洋近代主義受容の結果として現れているという矛盾に当事者も周辺の人々も気づく必要があるのではないか。

3. 「総合人間学から見えて来たこと」

中谷英明（AA 研所員）

総合人間学は 5 年前、今この世界で起こっていることをいち早く的確に把握して総括し、その上に立ってあるべき世界を考える、という目標に向かって提唱された。この間、世界が直面する諸問題、人類の歴史、文明の歴史、人間の本性（言語、）などに関して、多くの極めて重要な事実が明らかにされた。これらのうち「意識の形成と認識の転換」に関わるものは、フランス人間科学館刊行の雑誌 Social Science Information の特別号として論文集を刊行する。それらを含め、すべての重要な論考を集め、一般向けの商業出版として刊行する。いずれも 2010 年度内を予定する。

現在の人文・社会科学の弱点は、1) 総合的な視野（生物史、人類史、文明史、脳科学等の自

然科学の知見)を持つ「総合的専門領域」、2) 知の総合による「知の認識枠組みの変革」、3) 知の戦略的応用に関する「実践知」、の不在であると考え。これが総合人間学から見えてきたことである。認識に関する以上の総括を基に、今後は戦略的応用を中心にさらに考察を進めたい。

4. 「互酬性をめぐって：贈与と交換、集団と資源、意識と信頼、そして時間と死」

内堀基光 (AA 研共同研究員・放送大学教授)

互酬性 (あるいは互酬的關係) と交換の発生は、ヒトとなることの重要な指標である。この指標にからみつく特殊にヒト的な構成要素は、意識、集団、そしてモノと非モノ全般への拡大の可能性である。「すべての交換は等価交換である」と言えるであろうか。仏教の捨身飼虎のような一見完全な自己犠牲も、それに伴う宗教的価値に還元すれば等価が成り立つようにも思われる。それが成り立つとすれば、その宗教的価値は普遍性を持ち得るであろうか。

5. 「辞書と認識－タイ語辞書の開発を例に」

峰岸真琴 (AA 研所員)

人間は、「言語による世界認識」を試みる際に、思考の寄って立つ「言語の形式」のあり方を考察することで、世界を考察することとしてきたようである。

このようなことを可能にしてきたのは、周囲の事物が人間にもたらす意味としてのアフォーダンス (「見え」) によって、環境を意味づけているだけでなく、さらには、事物を何かしらに「見立て」る能力 (これを発表者は「疑似アフォーダンス」と呼ぶよう、提唱したい) を持つことによるのではないだろうか。

発表者は現在、タイ語辞典の電子化と機械辞書の開発を進めている。仮に人間の認識の枠組みが辞書に反映しているとすれば、屈折も活用もない、敢えて言えばヨーロッパ的意味での文法のない「孤立語」の辞書には、どのような世界認識が反映しうるか、本発表ではこのような問題について模索してみた。